



監督&脚本＝ジェーン・カンピオン／原作&脚本＝スザンナ・ムーア／出演＝メグ・ライアン／マーク・ラファロ／ケビン・ベーコン／ジェニファー・ジェイソン・リー（ギャガ・ヒューマックス共同配給／2003年アメリカ映画／119分）

ロマンティック・コメディの女王メグ・ライアンが、「女」を描くことにかけては、定評のある女性監督ジェーン・カンピオンに売りこんで、40……歳にしてはじめて挑んだ生々しい女の「性」、女の「業」をテーマとした映画。このため、主演を予定していたニコール・キッドマンは製作総指揮の立場に……。 「インザカット」とは「割れ目、秘密の部分、安全な隠れ場所」。この、何とも意味シんなタイトルどおり難しい映画。メグ・ライアンの体あたりの演技は見事だが……？

🎬 何とも意味シんなタイトル

この映画のタイトル『IN THE CUT（インザカット）』とは、割れ目、秘密の部分、安全な隠れ場所。その意味は、ギャンブラーが、他人のカードを盗み見るときに使う言葉。意味は隙き間、隠れ場所。語源は女性の性器。転じて、人から危害を加えられない、安全な場所のこと。ここからわかるとおり、この映画はすごく難解な、女の「性」や「業」をテーマとしたもの。また新聞紙上でも、そのうたい文句は「メグ・ライアン喘ぐ、乱れる、さらけ出す」という刺激的なもの。

私はこういう映画は基本的に苦手だ。しかし、主演がメグ・ライアン。しかも、本来ニコール・キッドマンの主演が予定されていたにもかかわらず、メグ・ライアンが自らを売り込んでオーディションを受けたり、ジェーン・カンピオン監督のホテルの部屋まで出向いて行って、即興演技をしてまでこの役を獲得し

た、という情報を得て、非常に興味を覚えたもの。この映画の脚本を読んで魅かれたことと、女優の魅力を引き出すことで定評のあるジェーン・カンピオン監督と是非一緒に仕事をしたい、というのが、メグ・ライアンがこの映画に主演したいと考えた動機とのこと。そんなメグ・ライアンが、今までの「ロマンティック・コメディの女王」のイメージをかなぐりすてて、裸身をさらけだし、ナマの女としての演技に没頭している姿は生ツバもの……？ 当然のことながら、今までロマンティック・コメディの女王というメグ・ライアンからは想像もつかないような、いくつかのセックスシーンもあり（ちなみに本作はR15指定）、某〇〇日付け〇〇新聞では露骨に「意外に……」とも……。

3つの才能

そんなわけで、主役はメグ・ライアンに決まったが、主役の座を奪われた(?) ニコール・キッドマンは、本作でははじめて製作総指揮を担当することになった。そしてこの映画の監督は、前述のとおり、ジェーン・カンピオンという女性監督。その代表作は『ピアノ・レッスン』(93年)と、ニコール・キッドマンが主演した『ある貴婦人の肖像』(96年)。彼女が監督したすべての作品は、「女性」の心理を巧みに描いたものとして評判を得ているものばかり。

このジェーン・カンピオン監督が、今までの「ロマンティック・コメディの女王」としてのメグ・ライアンからは想像もつかない、全く異質の魅力(?)をいかにひき出していくかが、この映画のポイント。いずれにしても、この3人の女性の個性と才能がぶつかり合ったのが、この『イン ザ カット』という映画。

現代女性を象徴する主人公たち

メグ・ライアン扮するフラニーは、ニューヨークの大学の文学講師。しかし性格は孤独で、心を許しているのは妹のポーリーン（ジュニア・ジェイソン・リー）だけ。他人との距離を一定に保ち、世間との接触を極力少なくし、独身のままで生きている。こんな主人公だけに、その趣味も変わっている。彼女にとって、自分と外界を繋ぐものは「言葉」だけだから、街のスラングを集めたり、地下鉄の広告にある気の効いたフレーズを集めたりすることが、彼女の唯一の楽し

み。また、そんな孤独な独身女にとって、そのセックス（処理）は……？

他方、妹のポーリーンは、結婚願望が強いものの、なかなかうまく男をつかまえられず、たまたま姉のところを訪れた刑事のマロイ（マーク・ラファロ）に興味を示すほど。「都会に生きる女」「職業をもった女」、しかし「一人孤独に生きる女」というイメージの主人公フラニーにメグ・ライアンがなりきっていることはたしか……。しかし、男の私の目からみると、メグ・ライアンは1961年生まれだから既に40歳を越えている。もともと、すごい美人ではなく、チャーミング系の女優だから、こんな地味で孤独な大学講師の役になりきってしまうと、どうもあまり魅力を感じない。思い切って、妹のすすめに乗って、マロイ刑事とのデートの時に、大きく肌を見せた妹のドレス（ワンピース）を着て出かけても、それほど魅力的とは……？

マロイ刑事の登場と微妙な女心……？

フラニーがマロイ刑事と出会ったのは、フラニーがスラング収集のために出かけたバー「レッド・タートル」の中で、バラバラ殺人事件が起こったため。この「レッド・タートル」のトイレの中で、セックスにはげむ男の手首に刻まれた「スペードの3」のタトゥーを目撃したフラニーは、マロイ刑事の手首にも、同じタトゥーが刻まれていることを知って、がく然とすることに……。ここまでの心の動きや、心理描写のアヤは私にもよくわかる。そして、マロイが事情聴取のために訪れたフラニーに対して性的興味をもち、性的対象として彼女を見ていることもよくわかる。しかし、実はそれから先、なぜフラニーがこのマロイ刑事に魅かれ、性的欲望が高まり、今まで体験したことのない感覚が疼きだすのか……？ わかるようで、実はよくわからないというのが、男としての私の正直な気持……？

姉妹そろって被害に……

フラニーとマロイとの、① 事件関係者と刑事との関係、② 何とも微妙な女と男との関係、が続く中、新たなバラバラ殺人事件が起こり、そしてフラニーもなぜか暴漢に襲われ、危うく……。そんな中、フラニーが妹のポーリーンの部屋を

訪れると、ポーリーンの姿はなく、バスの中をのぞくと、何とそこにはポーリーンのバラバラ死体が……？ 犯人は誰なのか？ 一体何のための犯行なのか？ フラニーの疑いは、当然マロニー刑事に向けられた。

そしてセックス遊びの中、冗談半分でマロイ刑事の手錠を取り出して、その1つをマロイ刑事の右手にもう1つを柱に固定したフラニーは、その合鍵を取り出すためマロイ刑事の服のポケットの中を探した時、そこに自分が襲われた時のプレスレットの片割れが入っていることを発見し、家を飛び出した。

フラニーのセックス観は……？

この映画のパンフレットには、① 稲垣都々世氏の「ジェーン・カンピオンが容赦なく描いた“女”の本能の生々しさ」と② 村山匡一郎氏の「心の不安定さと身体の解放……“そのとき”女性は何を見ているのだろうか」というタイトルの2つの解説が掲載されている。何とも興味深いのが前者で、まさにそのタイトルどおり、女の本能の生々しさを、男性の目から、実に論理的かつ興味深く分析している。とくに、独身生活で他人との接触を極力断っていた主人公フラニーが、セックスの面においても男とのセックスを避けていたのに、マロイ刑事と知り合ってから、このセックス観が一変し、動物的かつマゾ的なセックスにも平気で応じ、むしろそれを自ら望んでいく姿を見事に分析し表現している。

メグ・ライアン扮する主人公フラニーやその妹ポーリーンのセックス観について、私にはとてもこんな詳細な分析をする能力はないので、是非このパンフレットを読むことをおすすめしたい。

真犯人は？ そして殺人事件の意味は？

マロイ刑事を手錠で固定したまま、部屋を飛び出したフラニーをフォローしたのは、マロイ刑事の相棒のグラハム。グラハムはフラニーをなぜか一人一人いない灯台へ連れて行ったが、そこでフラニーが見たものは……？ 何とグラハムの腕にも、「スペードの3」のタトゥーがあったのだ。したがって……？

このラストに至って、私にもよくわかったのは次のこと。すなわちこの映画においては、ジェーン・カンピオン監督は、殺人事件の内容や犯人探しの妙それ自

体に意味をおいているのではないということが。すなわちこの映画でジェーン・カンピオン監督がバラバラ殺人事件をもち出したのは、①フラニーとマロイ刑事を接触させるため、そして②この殺人事件の捜査を通じてフラニーとマロイ刑事がどう関わっていくのかを描くため、さらに③マロイ刑事との交際(セックス)の中でフラニーの性的関心がどのように変化していくのかを描くためなのだ。

全体的に暗いトーンで統一された映画の流れの中では、随所に思わせぶりのシーンが登場するが、どうも一貫した脈絡で結ばれておらず、多少イライラする面があるが、それは多分男の感覚なのだろう。女性客の感覚としては、まさに主人公フラニーの意識と「同化」し、ひげをたくわえた若くハンサムながら野蛮な面をもつマロイ刑事とどのように向かい合い、どのように自分の性的関心、性的好奇心が発揮され満たされていくのか、ということに集中してこの映画を観ているのかもしれない。もしそうなら真犯人探しなどは、二の次、三の次のテーマとなってしまうのも当然かもしれない……？

始まりと終わりは、『ケ・セラ・セラ』

映画の冒頭、ゆっくりと流れるのは『ケ・セラ・セラ』の歌。私たちの世代は、ドリス・デイが歌った有名な曲として誰もが知っている歌で、どちらかというところ「さわやか系」の歌だと思うのだが、映画の冒頭に流れるこの歌は、何となくけだるい歌い方。30歳を過ぎた独身女が、都会で孤独に生きる不安定さをいかにも象徴している感じ。

そして最後にフラニーが手錠に繋がれたマロイ刑事の元へ戻り、彼と寄り添う形で終わるラストシーンで、再び流れるのが、またこの『ケ・セラ・セラ』の歌。しかも今度は字幕スーパー入りだ。最初は不安定だったフラニーの心理や生理がマロイ刑事との出会いと、殺人事件の解決によって「安定」したものになったのかもしれない……？

しかし、それにしても、不思議な映画であり、また不思議な音楽の使い方。やはり、ジェーン・カンピオンという女性監督の感性は、この俺には十分理解できないのかも……？

2004(平成16)年4月12日記